

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

【氏名】 SIM Choon Kiat (シム チュン キヤット)

【所属】(助成決定時) 日本大学・日本女子大学・非常勤講師

【研究題目】

日本とシンガポールにおけるエリート高校の現状と課題

【研究の目的】

日本ではエリート教育の重要性が認識されながらも、教育における平等性を重視するあまり、それについての議論ははばかれるきらいがある。一方、シンガポールは限られた人的資源をメリトクラシー(実力・業績主義)に基づいて合理的に配分しながら、稀少な才能を効率的に吸収する社会システムを築いてきた。教育制度の面でも、各教育段階において生徒を学力・習熟度別にふるい分けることによってエリートの選出に余念がない。そこで本研究では、日本とシンガポールの教育制度における選抜度の高いエリート高校にスポットを当て、生徒、教師および学校の管理職を対象とした質的調査と量的調査の結果に基づいて、両国におけるエリート高校の現状とあり方を明らかにしたうえで、21世紀の挑戦に向けてそれぞれの国が取り組む人材育成戦略および対処すべき課題について分析・検討するとともに、エリート高校をめぐる議論と研究に新しい切り口を提供することを目的とする。

【研究の内容・方法】

松下幸之助記念財団の研究助成金をいただく前のアンケート調査の結果により、生徒の社会貢献意識を喚起するにあたり、日本の名門高校が暗黙的であるのに対して、シンガポールの場合は明示的であることが明らかになっていた。ただ、日本では「自分はエリートだ」「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒の割合がともに約3割と低いものの、シンガポールの対象校でもその割合が3~5割にとどまり、制度的にリーダーを育て上げることの限界も垣間見えた。一方、シンガポールでは「将来社会の役に立つと思う」「社会的弱者を助けたい」と思う生徒の割合がともに9割を超え、日本生徒の割合よりはるかに高いことも示された。

松下幸之助記念財団の研究支援をいただいたお陰で、さらに教師と生徒を対象とした聞き取り調査、および学校の取り組みについての観察を行うことができ、上述の調査結果を裏付けるようなインタビューデータが以下のように多く得られた。

生徒の社会貢献意識について、日本の某対象校の副校長は学校の教育方針を次のように説明した。

「その生徒がその生徒なりに自分がどういうふうに関わることとを考えて、それを実現してくれればいい。」

また、同じ質問に対して別の対象校の校務主任は以下のように述べた。

「様々な分野で自分の力を出してもらえれば、それはそれで最高なので、特にリーダーを育てるというようなことはしていない。」

さらに、先生による生徒への働きかけに関して、某対象校の卒業生は以下のようにストレートに答えた。

「授業以外は基本的に放置です。」

その一方、シンガポールのA校で同じ質問をしたところ、同校の情操教育・学部長の以下のように語ってくれた。

‘We are focusing a lot on character education, as we want them to be stronger, to be resilient, to be leaders and to contribute to society.’

(われわれは人格教育に非常に重点を置いており、生徒たちにより逞しく、より打たれ強く、そしてリーダーになって社会に貢献してほしいと思う。)

## 【結論・考察】

本研究の結果から、日本の名門高校におけるリーダー育成の理念が生徒の自主と自由を重んじる「放置型」であることが、生徒を対象としたアンケート調査からだけでなく、教師と生徒を対象とした聞き取り調査からも裏付けされることになった。その一方、シンガポールの名門高校におけるその理念が、学校の強い介入による「統治型」であることも明らかになった。

「統治型」のシンガポールにおいて、社会貢献意識の高い A 校生徒が多いのは驚くに値しないであろう。それより「放置型」の日本においても国や社会のリーダーになりたい名門校生徒が 3 割、社会的弱者を助けたいと答えた生徒の割合も学校によっては 4~6 割ぐらいいることから、視点を変えれば「放っておいても自然と育ってくる」という結果にはなっていると言えよう。とはいえ、シンガポールからみれば、同じく秀才たちがせっかく集まっている日本の名門高校において、エリートやリーダーの育成を「放置」ということが些か好機を逸しているように見えるかもしれない。